

## 「思い悩むことなく」

### マタイによる福音書 6 章 31～34 節

心理福祉学部兼人間福祉学部チャプレン 木村 太郎

新しい1年の始まりを迎え、早いもので約2週間が経ちました。「一年の計は元旦にあり」という諺がありますけれども、皆さんは、この年における計画や目標を立てたでしょうか。

わたしは、毎年元旦に1つのことを祈ります。それは、今年1年こそ思い悩むことから少しでも解放されて生きたいという祈りです。日頃より様々なことについて思い煩うことが多い人間ですから、そう願うのです。しかし、そう祈り願った元旦の翌日から、今日の全学礼拝で何をお話しようかと思い悩んでしまいました。

わたしたちの誰一人として、思い悩むことから完全に自由になることはできません。世界に目を向けても、自らの日常生活に目を向けても、思い煩いがあります。ですから、それは人間のありのままの姿であり、思い悩むこと自体、実に人間らしいと言うこともできるかもしれません。

しかし、だからと言って、「思い悩むことは人間の宿命だ」と開き直りたくはありません。やはり、そこから解放されたいと願います。思い悩みから解放され、自由に伸び伸びと健やかに生きたいという憧れがあります。

そういうわたしたちに向かって、聖書は何を伝えているのでしょうか。

先ほど朗読されました聖書の言葉は、イエス・キリストが語られた言葉です。31 節でこう言われています。「…『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな」。

皆さんはこの言葉をどう受け止めるでしょうか。確かにわたしたちにはこういう思い悩みがあると思います。遡ること、今日このキャンパスに来る前に、「何を着ようか」と考えたかもしれません。2限が終わった後の昼食時、「何を食べようか」、「何を飲もうか」と友人と話したり、1人で考えたりしたかもしれません。

しかし、それは思い悩みではなく、迷いであるように思います。一時の選択の小さな迷い、日常生活の些細な迷いです。

勿論、食べること、飲むこと、そして着ることについて考えることを低く見積もることはできません。そのようなことに関する社会問題は山積しています。

にもかかわらず、自らに目を向けますと、思い悩みというのは、そのようなこととは少し違うのではないかと思います。

しかし、イエス・キリストはまず、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな』と語っておられます。

これは、いわゆる「衣食住」に関することです。ここには、「衣食住」の「住」に関することはありませんけれども、これは、わたしたちの日常生活のことです。つまり、わたしたちの一時の小さな、些細な迷いすら顧みられているということです。

そして、わたしたちの思い悩みという苦勞も覚えられているのです。34 節にある言葉です。「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である」。

わたしたちはなぜ思い悩むのでしょうか。思い悩むという苦勞を背負い込んでしまうのでしょうか。本当はそんなものを背負いたくはないけれども、どうしてもその苦勞から自由になれません。

なぜなら、わたしたちには自分自身と自分の生活を受け入れることができないところがあるからではないでしょうか。今ここにある自らを受け入れることができないとき、不満や満たされない思いが湧き起こってきます。そして、自らと他者を比較し、劣等感を感じたり、もしくは嫉妬の念に駆られます。そのような思いは1日では済みません。次の日に持ち越していき、またその次の日、そしてまたその次の日へと続いていきます。

思い悩むとは、「思い煩う」とも言います。「煩う」とは、病気に関することです。わたしたちは、ともすると、気づかぬうちに思い悩むという病いを煩ってしまうのです。それは、今ここにある自らと自らの生活を受け入れられない思いから来ることなのです。

今から約 10 年前、ある1つの本がベストセラーになりました。『置かれた場所で咲きなさい』という本です。著者は、渡辺和子さんというカトリックのシスターです。

この本のタイトル、「置かれた場所で咲きなさい」とは、ある詩の一節だそうです。今自分が置かれている環境を受け入れず、その環境の奴隷のようになって不平不満を述べるのではなく、自らが置かれた場所を受け入れる。そして、その環境での主人公になり、自由に伸び伸びと健やかに生きる。その

ことを詠った詩の一節です。

しかしこれは、現状に満足しなさいという少し後ろ向きの勧めとも受け取れます。なぜなら、今ここに  
ある自らと自らの生活に満足しないことこそが、成長へと導くということもあるからです。現状に満足する  
ことなく、安住することなく努力を続ける先にこそ、成功があると考えられるからです。そうであれば、  
「置かれた場所で咲きなさい」ではダメなのです。

にもかかわらず、「置かれた場所で咲きなさい」とは、わたしたち一人ひとりを、今この場所に置いてく  
ださった方がおられるということです。この詩の原文には、「神」という字があります。「置かれた場所で  
咲きなさい」とは、「神が植えたところで咲きなさい」という意味なのです。

皆さんは、この聖学院大学を選んで入学し、そして学びを続けています。皆さんが、この場所を選ん  
だのです。それは、ある意味では自己責任です。

しかし、自らが選んだ場所において、物事がうまくいかなくなることがあります。今ここに  
ある自らを受け入れられないということが起こるのです。そして、満たされない思いが湧き起  
こり、自らと他者を比較し、劣等感を感じたり、深い思い悩みに落ち込むことがあ  
ります。

そのようなとき、わたしたち一人ひとりを、この場所に置いてくださった方がおられると考  
えてみるのです。目には見えない神が、わたしたちをこの場所に置いてくださったと信じるの  
です。

その神の姿が、イエス・キリストの姿に表されています。キリストはおっしゃいます。「明日の  
ことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで  
十分である」。

「その日の苦労は、その日だけで十分である」とは、神がわたしたちの思い悩みという苦  
労をご存じであるということです。1日で済まない思い、次の日へ、また次の日へと持  
ち越してしまうような思い悩みという縄目から、なかなか解放されないわたしたちの姿  
を、神はご存じなのです。だからこそ、「明日のことまで思い悩むな。明日のことは  
明日自らが思い悩む」とお語りにもなります。

わたしたちは、思い悩みという苦労によって押し潰されてしまっ  
て先に進むことができなくなるのではなく、自らをこの場所に置いてくださった方が  
いることを信じて、1日1日集中して歩いていくのです。

なぜなら、神はわたしたちに必要なことを全てご存じであるからです。キリストは、  
こうお語りにもなります。「あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに  
必要なことをご存じである」。

わたしたちには、天の父がおられます。そして、わたしたち一人ひとりを、ふさわ  
しい場所に置いてくだ

さるのです。そして、必要なことをご存知の上で、全てを備えてくださるのです。その方を信じることにこそ、思い悩むことから自由になり、伸び伸びと健やかに生きる秘訣があるのです。

お祈りをいたします。

天の父なる神さま、秋学期のまとめの時期に入り、忙しくしているわたしたち一人ひとりを深く顧み、一日一日の学びに集中し、その学びから得られる実りを豊かに与えてください。これらの祈りと願いを、救い主イエス・キリストの御名によって御前におささげいたします。アーメン

2023年1月13日 聖学院大学 全学礼拝